



Title	17世紀末ヴォルガ・ウラル地方史料『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』の4写本：ロンドン、パリ、ベルリン、エディンバラ
Author(s)	長峰, 博之; NAGAMINE, Hiroyuki
Citation	日本中央アジア学会報, 19, 1-23
Issue Date	2023-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.19.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94180
Type	journal article
File Information	JB19_001nagamine.pdf



17世紀末ヴォルガ・ウラル地方史料 『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』の4写本 ——ロンドン、パリ、ベルリン、エディンバラ——

長峰 博之

はじめに

無名氏『ダフタリ・チンギズ・ナーマ *Daftar-i Chingiz-nāma / Dāftār-i Chingiz-nāmā*』(以下、DChN)は17世紀80年代にヴォルガ・ウラル地方において編まれたとされる無名氏のテュルク語史料である。草原世界の豊かな口頭伝承の伝統を背景に成立した史料の1つであり、以下の6つのダスタン(物語)で構成されている。

第1章 ジンギズ[=チンギス]⁽¹⁾の子孫のダスタンの章 *Faṣl-i dāstān-i nasl-i Jingiz*

第2章 アクサク・テムル[=ティムール]のダスタンについての章 *Faṣl fī beyān-i dāstān-i Aqsaq Temir*

第3章 イーサーの息子アマト／アメトのダスタンについての章 *Faṣl fī beyān-i dāstān-i ‘Isā oghlī Amat/Amāt*

第4章 エディグ・ビイ[=エディグユ]のダスタンについての章 *Faṣl fī beyān-i dāstān-i Edigā Biy*

第5章 滞在地と居住地についての章 *Faṣl fī beyān al-majālis vā al-maqān*

第6章 歴史のダスタンについての章 *Faṣl fī beyān-i dāstān al-tārīkh*

全体的に伝承的要素が強く、「史実を探る」という意味では扱いの難しい史料であるが、一方でチンギス家の政権消滅後のヴォルガ・ウラル地方における歴史的記憶、歴史認識の変容や知の伝播のあり方を検討するうえで非常に興味深い情報を含んでいる。Usmanov に代表される本史料に関する先行研究は旧ソ連圏の写本を中心に進められてきたが、本稿ではそれ以外の4写本(ロンドン[DChN/London]、パリ[DChN/Paris]、ベルリン[DChN/Berlin]、エディンバラ[DChN/Edinburgh])に含まれる独自の情報を抽出・分析し、そこからあらためて本史

(1) 写本により *Jingiz*、*Jinggiz*、*Chinggiz* などさまざまな表記が見られる。

料の史料的可能性について検討する⁽²⁾。

1. 研究史

Usmanov [1972: 98–101] に依拠しながら本史料の研究史を概観しておこう。本史料の研究利用は 19 世紀初頭からはじまるが⁽³⁾、その本格的な研究は 1822 年のカザン大学の Khal'fin によるテキスト [DChN/Khal'fin. 第 3 章が欠落]、さらに 1882 年のカザンの Dzhiganshin (Raḥīmjan Jihānsha) による全 6 章を含むテキスト [DChN/Dzhiganshin]⁽⁴⁾ の刊行により開始された。その後、DChN/Khal'fin や他の写本にもとづく第 1～3 章や第 6 章のロシア語訳や研究が公表された⁽⁵⁾。当時の研究の傾向として、おもに第 1～2 章 (また第 3 章)、そして独立した書物として『タタール年代記 *Tatarskie letopisi*』とも呼ばれた第 6 章への関心が高かったということがあるだろう。それは、それらの章が具体的な記述を含むことから当然なのではあるが、換言すれば、チンギス、ティムール、そしてヴォルガ・ウラル地方のタタール近現代史への関心の反映でもあったといえよう。

Usmanov [1972: 97–133] は、それまでの研究を総括したうえで本史料の実証的な文献学的研究を行ってその全容を広く学会に知らしめたものであり、いまにいたるまでまず参照すべき基礎的研究となっている。2002 年には Ivanics と Usmanov によってサンクト・ペテルブルグ 3 写本と DChN/Dzhiganshin を用いた優れたローマ字転写校訂テキスト (3 写本のファクシミリを含む) [DChN/Ivanics, Usmanov]⁽⁶⁾ が刊行された。これらにより本史料は各段に利用しやすくなり、多様な研究が現れるようになってきている。本稿にも関連する重要な研究とし

(2) 固有名詞の表記や転写の方法については小松久男他 (編)『中央ユーラシアを知る事典』(平凡社、2005 年) に準拠した。また、ジョチ家の在位年・没年に関しては、赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』(風間書房、2005 年) 巻末の「ジュチ裔系図」を参照した。

(3) 早くも 18 世紀前半に本書がロシアの官僚・歴史家 V.N. タティーシチェフに知られていたことは注目に値する (1737 年にオレンブルグで入手) [Usmanov 1972: 101, 123; TACH: 42]。この頃タティーシチェフは資史料の収集に注力しており、アブルガーズィー『テュルク系譜 *Shajara-yi Turk*』にも目を通していた [阿部 1996: 488]。

(4) DChN/Dzhiganshin は I.A. Mustakimov 氏のご厚意により入手することができた。記して謝意を示したい。

(5) これらのうち、1852 年の第 6 章のロシア語訳には東洋学者 I. ベレジン、第 1～3 章のロシア語訳である Vasil'ev, Balgimbaev [1907] には東洋学者 V.V. バルトリドの序文が付けられており [Usmanov 1972: 99–100]、当時の本史料に対する関心の高さを示している。比較的よく利用されてきた Panov [1934] による第 1～2 章のロシア語訳については、注 21 参照。また、第 3 章にも個別の関心が示された [cf. Akhmetzyanov 2011: 114]。第 6 章およびその補足部分に関する N.F. Katanov, I.M. Pokrovskii, *Otryvok iz odnoi tatarskoi letopisi o Kazani i Kazanskom khanstve* (Kazan': Tipo-lit. Imp. un-ta, 1905)、Rakhim [2004] (1930 年の執筆後未公刊のままであったが、2004 年に公表された)、そして本史料全体に関する İnan [1934ab] (日本では小林 [1982] が İnan の研究を詳しく紹介している) などはいまなお重要な研究である。

(6) DChN/Ivanics, Usmanov が利用した写本は SPbF IVRAN, B 344; B 2640; B 2587 であり (表 1 参照)、B 344 を底本としている。

では、ヴォルガ・ウラル地方における歴史叙述の体系のなかに本史料を位置づける Frank [1998; 2000]、カザン写本 [DChN/Kazan (ORRK NBL KFU, T. 40)] の独特の記述を詳細に分析する Mustakimov [2009]、そして Usmanov とともにローマ字転写校訂テキストを刊行した Ivanics の一連の研究および本史料の詳細なハンガリー語訳注を含む遊牧社会に関する包括的な研究 [Ivanics 2017] などがある⁽⁷⁾。

さらに、近年発見された、1813年にアブドゥッラフマーン・ウズケンディーによってトルキスタン(現カザフスタン)のカザフ王家の1人、アリー・アクバル・スルターン⁽⁸⁾に献じられた著作『チンギズ・ハンの物語 *Qışsa-yi Dāstān-i Chingiz Khān*』(以下、QDCh)は大きな注目に値する。本書は DChN 第1～3章と同様の内容を持ち、その後にアリー・アクバル・スルターン一族や周辺勢力の系譜などを簡潔に書き継いでいる [QDCh/Qozha, Zhandarbek: 5–22]。本書については Kozha, Zhandarbek らによる研究が進められており、両者によるキリル文字転写テキストとカザフ語訳、さらに Utebekov によるローマ字転写テキスト [QDCh/Utebekov] が刊行されている(両エディションとも写本のファクシミリを含む)⁽⁹⁾。

2. 写本

前述の、とくに Usmanov 以前の先行研究の関心の方向性はまた、写本の残存状況とも少なからず関係しているだろう。個人所有のものも含めて 40 以上の写本が Usmanov [1972: 101–104] によって確認されており、それに本稿で扱う 4 写本の情報を補足した写本の残存状況が表 1 である⁽¹⁰⁾。

この他、Frank [1998: 15, n. 10] が本稿で取り上げる DChN/Edinburgh とおそらく第2章を含むカザン写本を、Rakhim [2004] が第6章を含む 8 写本を、Äkhmätjanov [2006] がイブラギモフ記念言語・文学・芸術研究所(タタールスタン共和国科学アカデミー)所蔵の 7 写本を

(7) また、本史料全体のキリル文字転写テキストおよびタタール語訳 Sälīm Gıyläjetdinov, *Mirastan bish säkhifä. XVII–XIX gasirlar ädäbi-tarikhi yadkyarläre* (Kazan: Tatarstan kitap nashriyatı, 2011) pp. 37–96 や部分的なトルコ語訳も刊行されている。

(8) アリー・アクバル・スルターン(ロシア語史料では、アリケン Alikén)については、Erofeeva [1997: 95, 142–143]、QDCh/Qozha, Zhandarbek [8–11] を参照。

(9) 発見の経緯や本作品の内容については、QDCh/Qozha, Zhandarbek [5–22]、QDCh/Utebekov [21–26] を参照。

(10) 写本については、İnan [1934a: 9–11; 小林 1982: 198–200]、Galyautdinov [1981] も参照。Usmanov は未見の「完全写本」として DChN/London、DChN/Paris、DChN/Berlin の 3 写本を挙げているが、いずれも「完全写本」ではない(表 1 参照)。また、N. イサンベトに聞いたというカザフスタンの図書館の「完全写本」を紹介しているが、これについては未確認である。ただ、カザフスタン中央学術図書館所蔵の 1924 年筆写の写本 (*Shinghis khan zhāne onıng bileri*) は DChN の第 1 章とほぼ同内容であることが確認できる [Shafighi et al. 2015: 146–160; QDCh/Qozha, Zhandarbek: 12]。

表1

	第1章	第2章	第3章	第4章	第5章	第6章	筆写年代	
SPbF IVRAN, B 2640	○	○	○	○	○	○	1796年	
SPbF IVRAN, B 744	○	○	○	○	○	○	1779年	(B)
SPbF IVRAN, B 743	○	○	○	○	○	○	18世紀半ば	
SPbF IVRAN, B 3205	○	○	○	○	○	○	19世紀	
SPbF IVRAN, B 344 ⁽ⁱ⁾	○	○	○	○	○	○	19世紀	(A)
SPbF IVRAN, A 121	○	○	○	○	○	○	19世紀	(A)
RNB, Dorn No 527	○	○	○	○	○	○	19世紀	
ORRK NBL KFU, T. 762	○	○	○	○	○	○	19世紀	
DChN/Dzhiganshin ⁽ⁱⁱ⁾	○	○	○	○	○	○	?	
Isanbet ⁽ⁱⁱⁱ⁾	○	○	○	○	○	○	18世紀	
SPbF IVRAN, B 2587	○	○	○				18世紀	
SPbF IVRAN, B 742	○	○	○				19世紀	
SPbF IVRAN, B 343	○						18世紀初め	
SPbF IVRAN, B 345		○					19世紀	
DChN/Kazan (ORRK NBL KFU, T. 40) ^(iv)	○	○	○		○		1732年	(C)
ORRK NBL KFU, T. 2230		○					18世紀末	
ORRK NBL KFU, T. 581	○		○			○	19世紀	
ORRK NBL KFU, T. 135		○	○				19世紀	
SPbF IVRAN, B 2672	○					○	19世紀	
SPbF IVRAN, B 2675						○	19世紀	
ORRK NBL KFU, T. 587						○	19世紀	
ORRK NBL KFU, T. 1388						○	19世紀	
ORRK NBL KFU, T. 1589						○	19世紀	(B)
ORRK NBL KFU, T. 1658	○					○	19世紀	(B)
ORRK NBL KFU, T. 591	○					○	19世紀	
RGADA, d. 1164						○	18世紀初め	
KM, No 1254						○	?	
Vasil'ev, Balgimbaev 1907 ^(v)	○	○	○	○	○		?	
DChN/London	○						19世紀前半以前	
DChN/Paris	○	○	○				?	
DChN/Berlin	○	○	○		○		?	(C)
DChN/Edinburg	○	○	○	○	○	○	1825年	(A)

SPbF IVRAN: Sankt-Peterburgskii filial instituta vostokovedeniya Rosiiskoi akademii nauk

RNB: Rosiiskaya natsional'naya biblioteka

ORRK NBL KFU: Otdel rukopisei i redkikh knig nauchnoi biblioteki im. N.I. Lobachevskogo Kazanskogo federal'nogo universiteta

KM: Kasimovskii muzei RGADA: Rossiiskii gosudarstvennyi arkhiv drevnikh aktov, f. Pravitel'stvyushchii Senat

(A): 18世紀前半の出来事まで叙述する写本群

(B): 18世紀末もしくは19世紀半ばまで叙述する写本群

(C): 他の写本には見られない独自の記述を含む写本群

(i) DChN/Khal'fin が利用した写本。

(ii) DChN/Dzhiganshin が利用した写本。写本そのものは所在不明。

(iii) N. イサンベトの個人所有写本。

(iv) この写本は前半がカーディル・アリー・ベクの史書 [0b–69a]、後半が DChN [70a–79b] となっている。写本のナンバリングは2葉目からはじまっており、2葉目が f. 1 とされている。実際にはその前に裏面だけで後半が破損した葉があり、本稿では便宜上それを 0b としておく

(v) Vasil'ev, Balgimbaev [1907] が利用した写本。ロシア語訳は第1～3章までであるが、バルトリドの序文によれば、写本は第4～5章までを含んでいた [Vasil'ev, Balgimbaev 1907: 117–118; cf. Usmanov 1972: 100]。写本そのものは所在不明。

紹介している⁽¹¹⁾。

40以上の写本および前述の QDCh の存在は、本史料が広く普及していたことを示しているだろう [QDCh/Qozha, Zhandarbek: 12–13, 22. 注 3、58 も参照]。とくに、本史料はその後のヴォルガ・ウラル地方の諸史料に参照され続けた [Usmanov 1972: 154–156; Frank 1998: 76–79, 105, 132, 135–136]。また、写本の残存状況を見ると、やはり第 1～2 章への関心、また第 3 章への関心が高かったことがわかる。それはチンギス、ティムール、またイーサーの息子アマトへの関心を示しているだろう。そして第 6 章への関心が、とくに 19 世紀以降非常に高まったことも明確に見て取れる。さらに興味深いことに、第 6 章のある写本のいくつかには補足としてその後の歴史を書き継いでいるものがある (18 世紀前半の出来事まで叙述する写本群 [表 1 中の写本群 (A)]、18 世紀末もしくは 19 世紀半ばまで叙述する写本群 [表 1 中の写本群 (B)] などがある) [Usmanov 1972: 124]⁽¹²⁾。このことは、写字生が DChN の第 6 章に依拠しつつ、そこにヴォルガ・ウラル地方の同時代史を書き継いでいたことを意味しているだろう⁽¹³⁾。

3. 書名、著者、成立場所と年代、史料源をめぐって

ここで、本史料の書名、著者、成立場所と年代、史料源に関してふれておこう。本稿でも言及するように、諸写本における本史料のタイトルは一樣ではない [Usmanov 1972: 104–106]。現時点では、初期の諸写本 [SPbF IVRAN, B 2640: 2a; ORRK NBL KFU, T. 40: 70a; RGADA, d. 1164: 686a など] に付されている『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』という書名が比較的研究者に受け入れられており、本稿もこれに従っている⁽¹⁴⁾。

著者・成立場所については諸説がある⁽¹⁵⁾。前述したように、本史料は写本により後代の

⁽¹¹⁾ Utebekov は『チンギズ・ナーマ』(注 14 参照)および『ティムール・ナーマ』に属する中央アジアのいくつかの作品・写本を紹介している [QDCh/Utebekov: 19–20]。そのうちのいくつかはやはり中央アジア系の『ティムール・ナーマ』であることが確認できる [Sela 2011: 33–34. 注 32 参照]。

⁽¹²⁾ Usmanov によれば、マルジャーニーのもとにも写本群 (A) に属する写本があった。また、Usmanov は写本群 (B) のものとしてさらにペルシア語版を挙げているが、これと後述の『ファルハング・ナーマ』、『ヒカーヤト』、『ジャザー・イ・ジャング』の相関関係については議論がある (注 18 参照)。

⁽¹³⁾ 前述の QDCh の事例 (第 1～3 章の後にトルキスタンのアリー・アクバル・スルターン一族や周辺勢力の系譜・歴史を書き継いでいる) も興味深いものである。

⁽¹⁴⁾ Ivanics は、『チンギズ・ナーマ』はチンギスを扱う史書、文学の一ジャンルであり、そうしたテュルク・モンゴル系の人々の間に存在したダスタンや歴史的伝承 (「ナーマ」) が「ダフタル (冊子)」にまとめられたとしている [DChN/Ivanics, Usmanov: 10; cf. QT: 7–8]。一方、『チンギズ・ナーマ』というタイトルも見られ [DChN/Berlin: 1b など]、こちらを採る研究者もいる (İnan や Ivanics など)。

⁽¹⁵⁾ 成立場所についてはカザンやバシコルト説があり [cf. İnan 1934a: 11–13; 小林 1982: 200–203]、Usmanov [1972: 125–132, 177; DChN/Ivanics, Usmanov: 2, 14–15] は著者が都市ピリャルの住民の子孫で、ザイ川 (カマ川の支流) 流域の出身である可能性を指摘している。

補足が多く見られるが、もともとの成立年代は17世紀80年代とされている[Usmanov 1972: 123–125; Rakhim 2004: 560–561]⁽¹⁶⁾。ただし、Ivanics が指摘するように、各章(ダスタン)ごとの成立年代は個別に検討しなければならない問題である[DChN/Ivanics, Usmanov: 12–14; Ivanics 2017: 203]⁽¹⁷⁾。すなわち、個別に成立・流布していた各ダスタンが17世紀80年代にいまの形にまとめられたと考えられる(とくに第6章は『タートル年代記』とも呼ばれ、個別に成立・流布していたようである⁽¹⁸⁾)。各ダスタンの内容を考慮するならば、前時代までを扱うダスタンをまとめたうえで、そこに冒頭の系譜⁽¹⁹⁾および第6章(あるいは、第5～6章)を書き足した可能性もあるだろう。

DChNの史料源については、口頭伝承やシェジェレの影響以外にも、『オグズ・ナーマ *Oghuz-nāma*』『アルタン・デブテル *Altan Däbtär*』『モンゴル／元朝秘史』『集史 *Jāmi‘ al-Tawārīkh*』などの影響が議論されてきた[cf. Īnan 1934b; Usmanov 1972: 106–110; DChN/Ivanics, Usmanov: 9–10, 15–17; 小林 1982: 205–212]⁽²⁰⁾。本稿でも若干考察をくわえるが、DChNの史料源は重要な検討課題であり続けている。

それでは、先行研究では十分に調査されてこなかった旧ソ連圏以外の4写本に含まれる独自の情報を抽出・分析し、そこからあらためて本史料の史料的可能性について考察することにした。

⁽¹⁶⁾ Īnan [1934a: 10, 13–14; 小林 1982: 203–204] は、Rākhim, Gaziz [1925: 90] が紹介する1635年筆写の写本を根拠の1つとして成立年代は16世紀を下らないとしているが、その写本とはDChN/Kazanのことであり、実際にはその筆写年代はヒジュラ暦1144年ラマダーン月5日(1732年3月2日)[DChN/Kazan: 79b]である。

⁽¹⁷⁾ 各章の成立年代が異なることは言語学的分析からも窺われる。それによれば、チングスの物語の部分(第1章)の言語が最も古い特徴をもち、冒頭の系譜の部分は比較的新しいという[DChN/Ivanics, Usmanov: 17–18]。

⁽¹⁸⁾ 第6章と類似した内容をもつものとして、『ファルハング・ナーマ *Farhang-nāma*』(テュルク語? ペルシア語?)、Rakhim が発見した写本(注24参照)、『ヒカーヤト *Hikāyat*』(ペルシア語)、『ジャザー・イ・ジャング *Jazā-yi Jang*』(ペルシア語)、*Istoriya Tatarii v materialakh i dokumentakh* (Moskva: Gos. sotsial'no-ekonomicheskie izd-vo, 1937) pp. 122–124所収のテュルク語写本などがあることも興味深い。これらの相関関係については議論がある[cf. Usmanov 1972: 124, n. 125; Mustakimov 2008: 143–145; Gibadullin 2019: 691–692]。

⁽¹⁹⁾ 冒頭にヌーフ〜ジンギズ(チングス)〜シベリア・ハン国系の系譜、シベリア・ハン国からカシモフ・ハン国のハンとなった(アルブ・)アルスラン・ハン、ブルハン・スルターンにいたる系譜が掲げられている[DChN/Ivanics, Usmanov: 31–32]。この興味深い系譜については、別稿で検討してみたい。

⁽²⁰⁾ Usmanov は、書名に「ダフタル／デブテル」がつくことから、DChN が『アルタン・デブテル』のヴァリアントである可能性を示唆するが、Ivanics [1997] は、『アルタン・デブテル』の正確な内容は不詳であるため、これには否定的な態度を示している(『アルタン・デブテル』の内容については、吉田[2019]で検討されている)。また、Usmanov はDChN が『集史』を参照した可能性も指摘しているが、これについても慎重に検討する必要があると思われる。第4章のエディゲ(エディギユ)の系譜はカシモフ・ハン国史料のカーディル・アリー・ベクの史書(注22参照)に一致する[Usmanov 1972: 116; 長峰 2014: 15–16]。その他、さまざまな史料と共通するモチーフが議論されている[Ivanics 2011 など]。DChNの史料源については別稿であらためて検討したい。

4. ロンドン写本 [DChN/London]

全 134 フォリオ、約 17cm (6.75 インチ) × 10cm (4 インチ)、1 フォリオに 9 行、崩れたナスフ体、紙は 19 世紀前半のものとされ、購入の日付 (1840 年 5 月 9 日) から 19 世紀前半以前のものであることがわかる。1b–70a が DChN の第 1 章となっており、*Hādhā Qiṣṣa-yi Chinggiz Hān* (sic) と題されている [Rieu 1888: 281–282; QAB: 26–27]⁽²¹⁾。

興味深いことに、DChN/London をはじめとしたいくつかの写本には、ヒヴァ・ハン国史料のアブルガーズイー『テュルク系譜 *Shajara-yi Turk*』(1665 年成立)、カシモフ・ハン国史料のカーディル・アリー・ベク／ベクの史書 (1602 年成立。ラシードウッディーン『集史』のテュルク語抄訳を含む)⁽²²⁾が含まれている。以下にその事例を示そう。

- DChN/London の 70b–75b は『テュルク系譜』のチンギスに関する部分とアブルガーズイーにいたる系譜の抜粋、76a–134a はカーディル・アリー・ベクの史書 (ラシード『集史』のテュルク語抄訳) のやはりチンギスに関する部分となっている [QAB: 27]。
- DChN/London の 121b–124b にかけて『テュルク系譜』のテキストが挿入されており、じつはそれらはカーディル・アリー・ベクの史書のサンクト・ペテルブルグ写本 40b–41a の欄外の補足に一致する [QAB: 27]⁽²³⁾。
- 同じ写字生のものと思われる写本 (Ms. British Library, 11,726) は、1b–26a にカーディル・アリー・ベクの史書、26a–29a に『テュルク系譜』のそれぞれオグズに関する部を含んでいる [Rieu 1888: 282–283]。さらに、その『テュルク系譜』のテキストはカーディル・アリー・ベクの史書のサンクト・ペテルブルグ写本 10a–b の欄外の補足に一致している [QAB: 25–26]。
- カザン写本 [DChN/Kazan (ORRK NBL KFU T. 40)] は前半 [0b–69a. 表 1 注 iv 参照] がカーディル・アリー・ベクの史書、後半 [70a–79b] が DChN となっており、DChN/Edinburgh

⁽²¹⁾ 本写本に依拠したとされる Panov [1934] による第 1～2 章のロシア語訳があるが、本写本には第 2 章は含まれていない。この点について、Ivanics [2017: 205–206] は Panov が実際には Vasil'ev, Balgimbaev [1907] (あるいはそのもととなった写本か) を利用した可能性を指摘している。また、Panov [1934] の前半にはブハラで見つかったテュルク語写本にもとづくティムール自伝のロシア語訳が含まれているが、それが偽書として有名な 17 世紀インドのティムール自伝 (*Mal'fūzāt-i Tīmūrī*, *Tuzūkāt-i Tīmūrī*)。この自伝については、北川 [1997: 376–380]、Csiky [2006] を参照) のヴァリエントであることも興味深いところである。このヴァリエントは、1835 年にコーカンドのハン、ムハンマド・アリー (在位 1822–42 年) の命により、ホジェンドのカーディー、ナビージャーン・マフムードによってペルシア語からテュルク語に訳されたという [Panov 1934: 5; Csiky 2006: 440]。

⁽²²⁾ カシモフ・ハン国のハン、オラズ・ムハンマドに仕えたカーディル・アリー・ベクによって著されたテュルク語の史書。ときのモスクワのツァーリ、ボリス・ゴドゥノフへの献辞、『集史』のテュルク語抄訳、その後のオラズ・ムハンマドにいたる歴史からなる。本史書については、長峰 [2014]、Nagamine [2019a]、QAB [11–19] を参照。

⁽²³⁾ カーディル・アリー・ベクの史書のサンクト・ペテルブルグ写本には、他にも多くの『テュルク系譜』にもとづく欄外の補足が見られる。これらについては、Alimov [2023: 294–301] を参照。

は前半[1b–40a]が『テュルク系譜』、後半[41b–68a]がDChNとなっている。

- DChN/Parisの1b–2aの欄外にも『テュルク系譜』からの補足が見える(後述)⁽²⁴⁾。

以上の事例から、オグズやチングス家の系譜・歴史を叙述する際にカーディル・アリー・ベクの史書(ラシード『集史』のテュルク語抄訳)、『テュルク系譜』、そしてDChN⁽²⁵⁾がしばしば参照されたことが窺われる。またここでは、これらがヨーロッパ東洋学の興隆のなかで比較的早期に「再発見」されて普及したことも考慮に入れなければならないだろう⁽²⁶⁾。

5. パリ写本 [DChN/Paris]

全34フォリオ、21cm × 15cm、1フォリオに15行、ナスフ体、書写年代不明⁽²⁷⁾、第1章[1b–19b]、第2章[19b–32a]、第3章[32a–33b]の途中までを含む。カタログ上では、おそらくDChN/Khal'finにちなんで、*Aḥvāl-i Chingīz Khān vā Aqsaq Temūr*と題されている。[Blochet 1932: 233–234]⁽²⁸⁾。

①コンスタンティノーブル図

DChN/ParisおよびDChN/Khal'finには、第2章のアクサク・テミル(ティムール)のコンスタンティノーブル征服の話のところに次のような興味深い図が挿入されている(図①、図②)⁽²⁹⁾。

図①中央には「コンスタンティノーブル市 Qustaṇṭīya shahrī」、図②中央には「ルームのアレクサンドロスのコンスタンティノーブル城砦 ḥiṣār-i Qustaṇṭīya-yi Iskandar-i Rūmī」と記さ

⁽²⁴⁾ Rakhim [2004: 577–582]が発見した写本にもDChN第5～6章に類似した話とカーディル・アリー・ベクの史書の一部(「ハージー・ギレイ・ハンのダスタン」)が含まれている。Mustakimov [2008: 144]は、Rakhimの写本に含まれているDChN第6章と類似した話は、じつは『ファルハング・ナーマ』であると判断している(注18参照)。

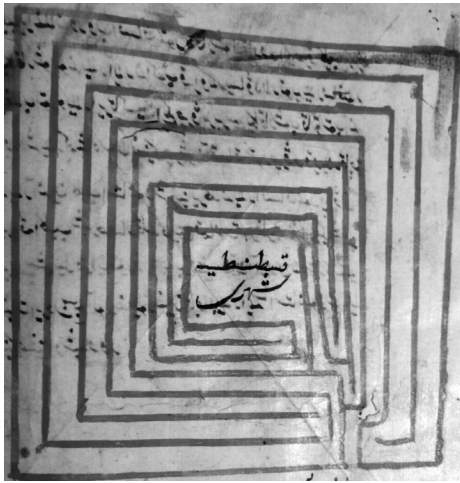
⁽²⁵⁾ ただし、DChNにはオグズは登場しない。

⁽²⁶⁾ 18世紀のタティーシチェフがDChNおよび『テュルク系譜』に目を通していたことについては、注3参照。前述したように、DChNは19世紀初頭にはヨーロッパ学会に知られていた。『テュルク系譜』も18世紀前半にはヨーロッパに広く知られていた[バルトリド 1939: 391–392; Hofman 1969: 26–31. 注58も参照]。Berezinによるカーディル・アリー・ベクの史書の紹介は1851年である。

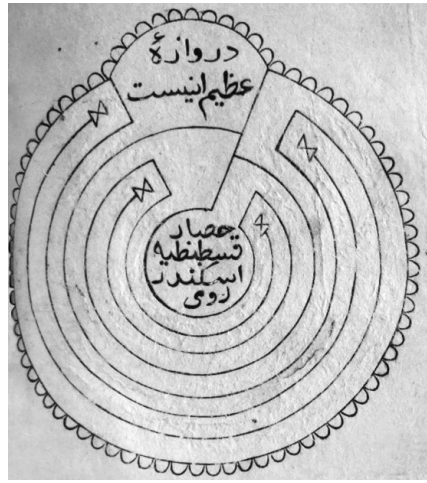
⁽²⁷⁾ Blochetのカタログでは17世紀の写しとされているが、根拠は示されていない。もしそうであるならば、最初期の写本ということになる。

⁽²⁸⁾ 1a, 34a–bは別作品。章題や第2章のイスタンブル図などは朱字で書かれており、途中で途切れているものの、現存部分に関しては良好な写本である。İnan [1934a: 9–10; 小林 1982: 198]はDChN/Khal'finと同様の内容としているが、DChN/Khal'finは第3章全体が欠落しているため、同様ではない。

⁽²⁹⁾ DChN/Khal'finはSPbF IVRAN, B344 [35a]を利用したものである。DChN/Dzhiganshin [29]では図は省略されており、SPbF IVRAN, B2640では該当箇所のフォリオ[22bと23aの間]そのものが欠落、SPbF IVRAN, B2587 [26a]およびDChN/Edinburgh [58a]では図の場所に半ページの空白が見られる[DChN/Ivanics, Usmanov: 72, n. 1]。興味深いことに、前述のQDChにも類似の図が挿入されている[QDCh/Qozha, Zhandarbek: 24a, 50; QDCh/Utebekov: 139]。



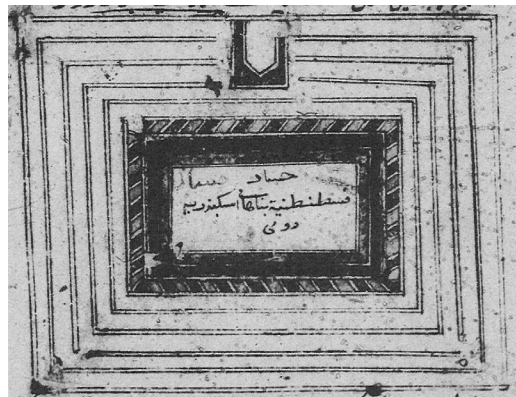
図① [DChN/Paris: 25b]



図② [DChN/Khal'fin: 70–71]



図③ [QA: vol. 1, 408–409]



図④ [QA: vol. 1, 408–409]

れている。伝承ではあるが、DChNではティムールがコンスタンティノープルを征服し⁽³⁰⁾、この図ではそのコンスタンティノープルがアレクサンドロスに関連付けられている。そして類似の図が、ラブグーズイー『預言者たちの物語 *Qiṣaṣ al-Anbiyā'*』(1310年成立)に見出せることがIvanicsによって指摘されている[Ivanics 2017: 242, n. 570]⁽³¹⁾。ラブグーズイーの説明によれば、「コンスタンティノープルに彼 [=ティムール] は砦を建てた。そのまわりを7回まわった後ようやく城に入ることができる」[QA: vol. 2, 508]という(図③、図④)。

⁽³⁰⁾ 関連して、第2章で語られるティムールの征服活動のうち、とくにブルガル征服の記述はこれまで多くの研究者の関心を引き論争的になってきた[cf. Usmanov 1972: 112–114, 116–120]。

⁽³¹⁾ 図③中央には「コンスタンティノープル城砦はこれである *hiṣār-i Qusṭantīniya bu turur*」、図④中央には「コンスタンティノープル城砦はルームのアレクサンドロスの諸建築物 *hiṣār-i (sic) Qusṭantīniya binā-hā-yi Iskandar-i Rūmī*」とある。この史料は普及し、オレンブルグにも17世紀の写本があった[QA: vol. 1, xiv]。

ヴォルガ・ウラル地方におけるチングス家の政権が消滅した後、チングス家のカリスマが低下し、一連の史書においてティムールがムスリム君主として英雄化された傾向が確認されている[Frank 1998: 17, 76–79]⁽³²⁾。そして、DChNの記述や前掲の図からは、そこで語られるティムールの英雄譚は「アレクサンドロス伝承」の影響を受けていることが窺われるのである⁽³³⁾。

②ティムールのモスクワ侵攻

これはDChN/Parisに限ったことではないが、ティムールのマスカウ(モスクワ)侵攻に際して、ティムールがウラジーミルに着いたとき、そこに現れた聖者ホージャ・ヒズルの言葉を受けて戦わずして帰還したことが語られる[DChN/Paris: 30a–b; DChN/Ivanics, Usmanov: 78–79]。類似の物語(「テミル・アクサクの物語 *Povest' o Temir-Aksake*」)が『ロシア年代記』にあり[Vasil'ev, Balgimbaev 1907: 149–150, n. 1; Usmanov 1972: 113–114]、そこではティムールはモスクワに運ばれたウラジーミルの聖母のイコンの奇跡により退却したとされる[PSRL: t. XI, 158–161; Miller 1995: 265–272]。

このウラジーミルの聖母のイコンの奇跡譚を含む「テミル・アクサクの物語」は、諸説あるが、およそ15世紀後半に現れたとされ、広くロシア社会に流布した[Halperin 1976: 48–52; Zhuchkova 1984; Miller 1995: 239–266]⁽³⁴⁾。すなわち、「テミル・アクサクの物語」とDChNの記述からは、ロシアのキリスト教社会で成立した奇跡譚がヴォルガ・ウラル地方のムスリム社会に形を変えて受容された可能性が指摘されよう。

③ 1b–2a の欄外の補足

1b–2a の欄外にはチングスからクチュム(シベリア・ハン国君主)にいたる系譜が補足されている。前述したように、じつはこれは『テュルク系譜』の「トゥラン(トゥラ)」の君主たち

(32) 関連して、Sela [2011: 19–20] が指摘するように、ヴォルガ・ウラル地方におけるティムールの英雄譚と、中央アジアにおける『ティムール・ナーマ』の相関性は重要な検討課題である。その際、QDChのような作品の存在も考慮に入れなければならないだろう。Sela [2011: 141–144] によれば、18世紀の中央アジアにおいてティムールの「英雄外伝 heroic apocrypha」である『ティムール・ナーマ』が流布した背景には、当時の中央アジアの政治的混乱がある。興味深いことに、ヴォルガ・ウラル地方におけるティムールの英雄譚はそれよりも早く、17世紀には広まっていた可能性が高い。その背景には、16世紀を通じてヴォルガ・ウラル地方のチングス裔政権が消滅し、同地がロシアに併呑されていったという政治的状況が考えられるかもしれない。

(33) アレクサンドロス伝承にしばしば登場する聖者ヒズルもここに登場する。ヴォルガ・ウラル地方におけるアレクサンドロス伝承については、Frank [2000] も参照)。中央アジアの『ティムール・ナーマ』にもアレクサンドロスはしばしば登場し、ティムールは「第2のアレクサンドロス」とされた[Sela 2011: 98–103]。

(34) 「テミル・アクサクの物語」の原形は、早くも15世紀初頭に現れたと考えられている。Gorskii [2000: 167–169; cf. 宮野 2023: 100] によれば、1470年代のロシア社会においてこの「テミル・アクサクの物語」や「パトゥ殺害の物語」が流布した背景に、ときの君主イヴァン3世(在位1462–1505年)の取り巻きによる、ジョチ・ウルスからの自立を民に納得させるためのイデオロギー的工作があったという。興味深いところでは、イヴァン4世期(在位1533–47年)の『絵入り年代記集成』にもこの物語は詳細に収録されている[栗生沢 2019: 87–88, 118–119, n. 105]。

に関する記述 [ShT: 177] とほぼ一致する。

DChN の史料源をめぐるさまざまな議論があるが、以上からは、先行研究で議論されてきた以上に多様な史料源 (伝承) のうえに DChN が成立したことが確認される。

6. ベルリン写本 [DChN/Berlin]

全 23 フォリオ、21.5cm × 16.5cm、1 フォリオに 13 行、タアリーク体もしくはナスタアリーク体、書写年代不明である。オスマン語で記されている⁽³⁵⁾。1b に『チンギズ・ナーマ *Chingīz-nāma*』というタイトルが朱書きされ⁽³⁶⁾、また、1a には本文とは違う筆跡で *Hādhā kitāb-i tavārīkh-i Khān Chīngghiz (sic) ing ašlın beyān edür* と題されている [Pertsch 1889: 269; İnan 1934a: 10; 小林 1982: 198]⁽³⁷⁾。内容としては、部分的な第 1 章 [1b–11b, 12a] と第 2 章 [15a–17a, 18a–b]、第 3 章 [19b–22a] の途中まで、そして第 5 章 [13b–14a] を含んでいる。

DChN/Berlin は他の写本には見られないいくつかの興味深い記述を含んでいる。この部分に見られる情報は、Mustakimov によって詳細に紹介された DChN/Kazan [Mustakimov 2009] と同系統のものであることが Ivanics によって指摘されているが [Ivanics 2017: 204, n. 398. 表 1 中の写本群 (C)]、具体的な検証はなされていない⁽³⁸⁾。ここでは、それらのうちいくつかの事例について検討する⁽³⁹⁾。

① *kötān khān*

先行研究において、DChN とカーディル・アリー・ベクの史書、そしてカーディル・アリー・ベクの史書とヒヴァ・ハン国史料ウテミシュ・ハージー『チンギズ・ナーマ *Chingīz-nāma*』(16 世紀半ば成立) の間に何らかの参照・被参照の関係があったことが確認されている [ChN: xxiii–xxv]⁽⁴⁰⁾。一方、DChN/Berlin および DChN/Kazan、そしてウテミシュ・ハージー『チン

⁽³⁵⁾ DChN/Khal'fin を含め、他のいくつかの写本にもオスマン語の要素は認められる。Usmanov [1972: 125–126]によれば、それは「18 世紀末と 19 世紀初頭の編者の関与の結果」である。

⁽³⁶⁾ *Hādhā Chingīz-nāma bu dur ki* ではじめられている。『チンギズ・ナーマ』というタイトルについては、注 14 参照。

⁽³⁷⁾ 全体的に母音記号が付されているのが特徴的である。章題などに朱字が用いられているが、全体的に正確な筆写とはいえ、かなりの異同・欠落が見られる。また、f. 17 から異なる紙が用いられている。

⁽³⁸⁾ 例えば、Mustakimov [2009: 122] が挙げる DChN/Kazan の特徴 (「カルマク」が「モンゴル」に置き換えられているなど) は DChN/Berlin にも確認される。Mustakimov [2013: 52] はさらに同じ系統に属するものとしてイブラギモフ記念言語・文学・芸術研究所蔵の写本 (f. 39, ed. khr. 6403. 本写本については、Ākhmätjanov [2006: 20–21] を参照) を挙げており、これらについて、DChN に異なるヴァージョンがあった可能性をも示唆している。

⁽³⁹⁾ 本稿でとりあげる以外にも多くの興味深い事例が見られる。DChN/Berlin についてさらに詳しくは別稿で論じてみたい。

⁽⁴⁰⁾ DChN とカーディル・アリー・ベクの史書の関係については、注 20 参照。また、クリミア・ハン国史料アブデュルガッファール『諸情報の要諦 *Umdet ül-Ahbār*』(1748 年成立) はウテミシュ・ハージー『チンギズ・ナーマ』を参照したか、両者は共通の史料源をもつ可能性が高い [川口 2009: 161]。

ギズ・ナーマ』にはさらに次のような記述が見られる。

トゥガルの息子ケルダン・ハン [=ケルディ・ベク ?]⁽⁴¹⁾ は *kökün juyghan kötän khān* と呼ばれている [DChN/Berlin: 12b]。

ベルディ・ハン は *kökin yuyghan kötän khān* と呼ばれている [DChN/Kazan: 77b; Mustakimov 2009: 123]。

彼 [=ベルディ・ベク] は *kökin/keräkin kötän khān* / *kökin qırghan kötän khān* と呼ばれている [ChN: 50a, 36; QT: 36b, 47]⁽⁴²⁾。

Göncöl によれば、この異名は「[一族を] 根絶やしにしたキョテン⁽⁴³⁾・ハン *kökin qırghan kötän khān*」の意とされる [Göncöl 2021: 55]。この異名はベルディ・ベク (ジャーニー・ベクの息子。在位 1357–59 年) がハン位を奪う恐れのある親族や息子たちを殺害したという逸話からきており [ChN: 50a, 35–36; QT: 36a–b, 47]、同様の話がティムール朝史料『ムイーン史選 *Muntakhab al-Tawārikh-i Mu'īnī*』(1414 年成立) にも見られる [MTM/Aubin: 85]。

また、DChN/Berlin に見られる話ではないが、『ムイーン史選』はベルディ・ベク死後にある人物がベルディ・ベクの息子ケルディ・ベクとして推戴されたと伝え [MTM/Aubin: 85–86]、ウテミシュ・ハーギー『チンギズ・ナーマ』はその人物が「偽 *yalghan* ケルディ・ベク」と呼ばれたことを伝える [ChN: 53b, 42; QT: 40b, 52]⁽⁴⁴⁾。そして興味深いことに、『ムイーン史選』パリ写本の「王朝表 *jadwal*」⁽⁴⁵⁾ において、ベルディ・ベクのラカブの欄に「*kötän khān*」、ケルディ・ベクのラカブの欄に「*yalghan*」と記載されているのである [MTM/Paris: 303b; Nagamine 2019b: 43]。

以上からは、ヴォルガ・ウラル地方史料 DChN/Kazan および DChN/Berlin とヒヴァ・ハン国史料『チンギズ・ナーマ』、そしてティムール朝史料『ムイーン史選』にジョチ・ウルスに関する情報が共有されていたことが確認される (ただし、そうした情報の正確性について

(41) DChN/Berlin ではベルディ・ベクがケルディ・ベクと混同されている可能性がある。

(42) 『諸情報の要諦』においては「*kökin qırghan kötän khān*」[UA: kn. 1, 264b, 78; kn. 2, 56–57]。

(43) 「Bottom, ass」の意であり、蔑称とされる [Göncöl 2021: 55, n. 4]。

(44) ベルディ・ベクの親族殺しおよび偽ケルディ・ベクの話は、『ムイーン史選』と同じ著者に帰せられるトプカプ宮殿博物館附属図書館蔵アルバム B. 411 [Nagamine 2023: 38. 本アルバムについては、川口 [2007: 147–157] を参照]、また『ロシア年代記』[PSRL: t. X, 229, 233] にも見える。

(45) これまで十分には注目されてこなかった『ムイーン史選』パリ写本の王朝表については、川口 [2007: 140–143] を参照。

は個別に検討されなければならない)。ウテミシュ・ハーギー『チンギズ・ナーマ』の情報源については、遊牧社会の口頭伝承のみならず、ジョチ・ウルス後裔政権内で著された史書を参照した可能性が指摘されている [ChN: xxi–xxiii]。『ムイーン史選』のジョチ・ウルスに関する記述については、その不正確さやそれによって引き起こされた研究上の混乱は夙に指摘される場所であるが [cf. 川口・長峰 2013: 38–41]、やはり独自の情報源を利用した可能性が議論されている [cf. Binbaş 2018: 184–185, n. 28] ⁽⁴⁶⁾。そうした情報の一部が、DChN/Berlin および DChN/Kazan にも共有されていることになる。ジョチ・ウルスおよびその後裔政権と周辺諸勢力 (ティムール朝) 間での歴史的知識の伝播のあり方を考えるうえで興味深い事例であるといえよう ⁽⁴⁷⁾。

②ジャーニー・ベクのベクたち

DChN/Kazan には「ハン、ジャーニー・ベク (在位 1342/3–57 年) 時代のベクたちの名」に関する興味深い情報があり、それは Mustakimov [2009] によって詳細に分析されている ⁽⁴⁸⁾。一方、DChN/Berlin にも同様の情報があるが、異なる点もある。DChN/Kazan に「qongrat qırıq süngüli Q.r.z Bulat Bahādurning oghli Bek Biy」とある箇所を、Mustakimov は「コングラト——40の槍の持ち主 ⁽⁴⁹⁾、Q.r.z プラト・バハドゥルの息子ベク・ビイ」と解釈している [DChN/Kazan: 78a; Mustakimov 2009: 123]。しかし、この箇所は DChN/Berlin では「コングラト・アリー・ビイ qongrat ‘Alī Biy」と読める (「Q.r.z プラト・バハドゥルの息子ベク・ビイ」の名は見えない) [DChN/Berlin: 13a; Ivanics 2017: 150–151]。「コングラト・アリー・ビイ」はトクタミシュ配下の有力ベクであった人物である [川口 2002: 83–84; Seleznev 2009: 34–35]。「ハン、ジャーニー・ベク時代のベクたちの名」とされているが、ここには他にもトクタミシュ家配下の有力ベクたちの名が見え、この箇所も「コングラト・アリー・ビイ」と読む方が自然に思える ⁽⁵⁰⁾。総じて DChN/Kazan の方が良好な写本であるが、この箇所に関しては「qongrat」の語の後が欠落して文章が混乱しており、それを DChN/Berlin によって補正できる可能性がある。

⁽⁴⁶⁾ 『ムイーン史選』パリ写本の王朝表およびトプカプ宮殿博物館附属図書館蔵アルバム B. 411 のジョチ・ウルスに関する部分については、Nagamine [2019b; 2023] を参照。

⁽⁴⁷⁾ また、DChN/Kazan および DChN/Berlin には『テュルク系譜』と類似した表現も見られる [Mustakimov 2009: 123; DChN/Berlin: 12b]。

⁽⁴⁸⁾ ここに現れるベクたちについては、Iskhakov [2011]、Sabitov [2014] などでも検討されている。

⁽⁴⁹⁾ Agatai の考察によれば、「40の槍の持ち主」とは「総司令官」「ハンの親衛隊長」の意 [Agatai 2021]。

⁽⁵⁰⁾ シリン・ウルク・テムル、アルゲン・カラ・ホージャ、バリン・サライ・ビイの名が見える。これらのベクたちについては、川口 [2002: 83–84]、Seleznev [2009: 101–102, 203]、Mustakimov [2009: 127]、Iskhakov [2011: 23–24] を参照。また、『ムイーン史選』王朝表においても、トクタミシュの「大アミール amīr al-umārā」の欄に「アリー・ベク」の名が見える [MTM/Paris: 303b; Nagamine 2019b: 44]。

③ トクタミシュの物語

DChN/Kazan、DChN/Berlinともにトクタミシュの物語がある[DChN/Kazan: 79a; Mustakimov 2009: 127–128; DChN/Berlin: 17a–18a. DChN/Berlin では「トクタミシュ・ハンのダスタン Dastān-i (sic) Toqtamish Khān」と題されている]。それによれば、トクタミシュの2人の息子(DChN/Kazan では、イスカンドルとアブー・サアド[サイード])をギレイ・バイという名の人物が養育し、後に彼らがクリム(クリミア)のハンとなり、息子たちにギレイと名づけるようになったという。クリミア王家のハージー・ギレイ家の「ギレイ」の由来については諸説あるが[cf. Zaitsev 2014: 133–135]、ここではそれがトクタミシュ家に関連づけられているのである⁽⁵¹⁾。じつは諸史料のなかには、トクタミシュをハージー・ギレイ家の系譜に結びつけるものがあり[赤坂 2016: 247–249; 長峰 2023: 31, 36]、またときにクリミア・ハン国は「トクタミシュ・ハンのユルト Tokhtamyshev tsarev yurt」と呼ばれた[Trepavlov 2011: 374–375]。DChN/Kazan、DChN/Berlin にあるトクタミシュの物語もそうした興味深い事例の1つである。

④ 第5章の記述

DChN/Berlinの最後として、第5章の記述への増補[DChN/Berlin: 14a]をとりあげる。ここでは、「異教徒 kāfir」(モスクワ／ロシア)がウズ・テムル・ハンからアチュグルハン(アストラハン)を(1556年)、サーフィー・ギレイ・ハン(カザン・ハン国君主サファー・ギレイ[在位 1525–32, 35–46, 46–49年])からカザンを奪い(1552年)⁽⁵²⁾、その「異教徒」にイスマーイール(ノガイ・オルダのビイ[1555–63年])が接近したという、ある程度史実をふまえた話が語られている。それによれば、アストラハンが異教徒に奪われた後、ハージム・スルターンは「カザク qazaq」に出て⁽⁵³⁾、ブハラの子のハンのもとに行き、ウズカンジ(ウルゲンチ)を与えられた。また、イスマーイールのためにおこったとされる戦いのところで、アク・クバク(アストラハン・ハン国君主アク・コバク[在位 1532–33, 45–46年])、ヤムグルチ(アストラハン・ハン国君主[在位 1546–50, 51–54年])、ウズ・テムル・ハンが言及されている⁽⁵⁴⁾。

この話に登場する人物のうち、ウズ・テムルの比定は難しいが、アストラハン(そしてジャーン朝／アシュタルハン朝)王家の祖先の名と推定される[cf. Trepavlov 2009: 372]。ハージム・スルターンは、ウルゲンチとの関連からすると、ヒヴァ・ハン国君主ハージー(ハージム)・ムハンマド(在位 1558–1603年)、そして、「ブハラのハン」はシャイバーン朝君主アブドゥッ

⁽⁵¹⁾ 追放された10歳のジョチ家の皇子がギレイという農夫に保護されたという伝承もある[Howorth 1880: 449–450]。

⁽⁵²⁾ 異教徒によりカザンが奪われる話はDChNの第6章にも見られる。この部分は、内容的には一致しないが、第6章のヴァリエントとみなすこともできるかもしれない。

⁽⁵³⁾ 「カザク」は「逃亡者」「放浪者」の意味で用いられるようになり、現行の支配者に対する権力の要求者およびそれを支持して略奪行為を行う集団、またそれに類する行動を指すようになった[長峰 2009: 11–12]。

⁽⁵⁴⁾ 前述のイブラギモフ記念言語・文学・芸術研究所蔵の写本にも類似の話が見出される(注38参照)。

ラー2世(在位1583–98年)あるいはアブドゥルムウミン(在位1598年)と推定される⁽⁵⁵⁾。すなわち、ここにはヒヴァ・ハン国とシャイバーン朝など中央アジアの情勢に関する情報が挿入されている可能性がある⁽⁵⁶⁾。そうであるならば、これもまたジョチ・ウルス後裔政権あるいはそれが存在した空間の間での歴史的知識・記憶の伝播を考えるうえで非常に興味深い事例といえよう⁽⁵⁷⁾。

7. エディンバラ写本 [DChN/Edinburgh]

DChN/Edinburgh は、1819–25年にアストラハンにおいてスコットランド宣教師のジョン・ディクソンによって収集された20点のテュルク語写本コレクションの一つである [Walsh 1959: 171–172]。全68フォリオ(40b–41aは空白)、約20.3cm(8インチ)×16.5cm(6.5インチ)、1フォリオに17行で、前半[1b–40a]が『テュルク系譜』⁽⁵⁸⁾、後半[41b–68a]がDChNとなっている。1825年にハージー・タルハン(アストラハン)の‘Abd al-Raḥmān b. ‘Abd al-Wahhābにより筆写された [Walsh 1959: 178–179; Zaitsev 2009: 208–209]⁽⁵⁹⁾。DeWeese と Frank が紹介するように、全6章を含む良好な写本である [DeWeese 1994: 383–384, n. 126; Frank 1998:

(55) ハージー・ムハンマドはシャイバーン朝アブドゥッラー2世のホラズム征服により一時期サファヴィー朝に逃れ、アブドゥッラー2世の死後にウルゲンチに帰還した [Burton 1997: 74–76, 85–86, 104]。

(56) 一方でこの話は、ウズ・テムルがジャーン朝／アシュタルハン朝王家の祖先であるならば、アストラハン・ハン国出身の同王家がブハラに移動してシャイバーン朝の保護を受け、その断絶後にジャーン朝が成立したという歴史的出来事(1599年)を反映している可能性も考えられうる。推測の域を出ないが、ジャーン朝成立の話とヒヴァ・ハン国のハージー・ムハンマドの話が混同されているのかもしれない。

(57) Mustakimov [2009: 128] は、ヴォルガ・ウラル地方と中央アジアの諸史料について、「ブルガル地方とシバン家の領域の間に密な関係」があったことを示唆している。

(58) 『テュルク系譜』の最後[39a–40a]には18世紀前半にいたるクリミアのハンたちに関する興味深い増補がある。注目すべきことに、近年、この『テュルク系譜』およびクリミアのハンたちに関する増補と同様の内容をもつ2写本(マンチェスター写本[ジョン・ライランズ図書館所蔵 The Turkish Collection, Mss 76]とキエフ写本[ヴェルナツキー記念ウクライナ国立図書館所蔵 F. V, No. 3780])が Zaitsev [2016] と Seityag'yaev [2011: 340–346, 2021] によって「再発見」された(キエフ写本はさらに DChN の第4章と同内容の部分も含んでいる [Seityag'yaev 2022. 注20も参照])。Zaitsevによれば、マンチェスター写本は1824年(もしくは1816年)にカバルダの著名な知識人ショラ・ノグモフ(1794–1844年)によって筆写され、そしてやはり北コーカサス(カラス)を拠点としたスコットランド宣教師団を介してマンチェスターにもたらされた。また、東洋学者ユリウス・クラブロートは1807年にモズドクで DChN/Edinburgh と同じ構成の写本を見ていたという。Zaitsev はカタログ上の情報からマンチェスター写本のクリミアのハンたちに関する増補部分[69a–71a]が DChN/Edinburgh と同様と判断しているが、筆者はマンチェスター写本を調査し、同内容であることを確認した。この興味深い増補部分については別稿で論じたい。

(59) アストラハンにおける活発な文化活動については、Zaitsev [2009] が詳しく紹介している。DChN/Edinburgh の写字生(‘Abd al-Raḥmān b. ‘Abd al-Wahhāb)の別の作品の奥書には「アストラハン村、カザン街区において」 [Walsh 1959: 173] とあり、Zaitsev [2009: 210] は「民族的観点、また文化的観点におけるアストラハンに対するカザンの強い影響」があったことを指摘している。

15, n. 10]⁽⁶⁰⁾。

①第6章の増補

前述したように、第6章のある写本のいくつかには補足としてその後の歴史を書き継いでいるものがある。DChN/Edinburghの第6章[67b–68a]には1135(1722–23)年までの出来事が記されており、それはSPbF IVRAN, B344に依拠したとされるDChN/Khal’fin[90–91]のテキストの内容とほぼ一致する⁽⁶¹⁾。また、この「18世紀前半の出来事まで叙述する写本群」(表1中の写本群(A))は、いずれも全6章を含んでいる。すなわち、章構成も含めて、DChN/Edinburghが「18世紀前半の出来事まで叙述する写本群」に属することが確認される。

②アストラハン、ジョン・ディクソン、そしてカゼム＝ベク

DChN/Edinburghを収集したスコットランド宣教師ジョン・ディクソンは、1825年にアストラハンでモーセ5書と『新約聖書』のテュルク語訳を出版するなど[Walsh 1959: 171; O’Flynn 2017: 309–311]、この時期のアストラハンで精力的に活動した人物である。ここで、のちにカザン大学東洋学の中心となるカゼム＝ベクがアストラハンに滞在(1822–25年)していたことに注目しておきたい。カゼム＝ベクはスコットランド宣教団と懇意になり、1823年にキリスト教に改宗した[シンメルペンニク＝ファン＝デル＝オイェ 2013: 127–130]。カゼム＝ベクがジョン・ディクソン(あるいはスコットランド宣教団)の写本収集に何らかの形で関与した可能性も考えられよう。DChN/Edinburghは、ヴォルガ・ウラル地方およびその周辺のムスリム社会における知の伝播、そしてそれへのヨーロッパ東洋学の関わりを垣間見せてくれるものである⁽⁶²⁾。

⁽⁶⁰⁾ 第2章のコンスタンティノーブル図は、スペースはあるが書かれていない(注29参照)。また、同コレクションにはDChNと『テュルク系譜』の写本がさらに1部ずつ確認される[Walsh 1959: 182–183]。もう1部の『テュルク系譜』の写字生は‘Abd al-Rahmān b. (? Qurbān ‘Alī)とされているが、この人物もアストラハンの住人であろう[Zaitsev 2009: 209, n. 3]。

⁽⁶¹⁾ バシコルト反乱(1707–08年)、ロシア(ピョートル1世[在位1682–1725年])のペルシア遠征(1722–23年)の記述などが見られる。件のバシコルト反乱は詳細に語られており、ロシア軍を率いたバル・ヒヴァンスキー(P.I. ホヴァーンスキー公)の名も見える(このバシコルト反乱については、豊川[2006: 167–170]を参照)。ただし、DChN/Edinburghのこの部分のテキストには若干の欠落も見られる。

⁽⁶²⁾ 注3、58も参照。カゼム＝ベクも含め、ヴォルガ・ウラル地方における東洋学者とムスリム知識人の関わりについては、磯貝[2015]を参照。関連して、1740年にマンスール b. アブドゥッラフマーン(ロシア帝国初代ムフティーの祖父)がタティエーシチェフとP.I. ルイチコフの要請によりオレンブルグにおいて『チングス・ハン朝史 *Tārīkh-i Āl-i Chīngī Khān*』(ジャマル・カルシー『『明快』補遺』のテュルク／タタール語抄訳)を執筆し、それが翌41年にはロシア語訳されたことも興味深い[TACH: 23–43]。

おわりに

以上、本稿ではDChNの4写本(ロンドン、パリ、ベルリン、エディンバラ)について、推論も交えながら、縷々述べてきた。これらの4写本は、ジョチ・ウルスとその後裔政権、そしてその歴史的記憶のあり方に関する興味深い情報を含んでいる。また、前述したように、DChNの史料源については先行研究で種々議論されてきたわけだが、それ以上に多様な史料源(伝承)のうえの成立し、そして多様な受容のされ方をしていった史料であったことがあらためて確認される。

ヴォルガ・ウラル地方におけるチンギス家の政権が消滅した後、チンギス家のカリスマが低下し、一連の史書においてティムールが英雄化された傾向があるが、それでも、チンギス家の歴史が語られ続けたことは重要ではないだろうか。そして、オグズやチンギス家の系譜・歴史を叙述する参照する際にカーディル・アリー・ベクの史書(ラシード『集史』のテュルク語抄訳)や『テュルク系譜』とともに、DChNがしばしば参照されたのである(また、前述のQDChの事例も想起されたい)。また、これらがヨーロッパ東洋学の興隆のなかで比較的早期に「再発見」されて普及したことも重要だろう。

本稿では4写本に焦点を絞ったが、DChNおよびその写本研究は、ヴォルガ・ウラル地方およびその周辺における知の伝播のあり方、また、ムスリム社会とヨーロッパ東洋学との関わりなどを解明する手がかりになると思われる。

付記：本稿は科学研究費(19K01029)による成果の一部である。本稿の内容については、2020年度日本中央アジア学会年次大会およびCentral Eurasian Studies Society 22nd Annual Conferenceの席上において多くの貴重なご意見を、とくに、河原弥生氏とRon Sela氏には有益なご助言をいただきました。ここに記して謝意を表します。また、本稿脱稿後に、DChNの英語訳注Mária Ivanics, *The Book of the Činggis Legend: A Critical Edition of a Seventeenth-century Volga-Turkī Source*, Leiden-Boston: Brill, 2023が刊行された。本書の刊行によりDChN研究がさらに前進することを期待したい。

参考文献

●史料

- ・『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』

DChN/Berlin: Anonymous, *Chingiz-nāma*, Ms. Staatsbibliothek zu Berlin, Diez A quart. 137.

DChN/Edinburgh: Anonymous, *Daftar-i Chingiz-nāma*, Ms. Edinburgh University Library, Or. Ms. 614,

ff. 41b–68a.

DChN/Kazan: Anonymous, *Daftar-i Daftar-i* (sic) *Jinggiz-nāma*, Ms. Otdel rukopisei i redkikh knig Nauchnoi biblioteki im. N. I. Lobachevskogo Kazanskogo federal'nogo universiteta (ORRK NBL KFU), T. 40, ff. 70a–79b.

DChN/London: Anonymous, *Hādhā Qiṣṣa-yi Chingiz Hān* (sic), Ms. British Library, Add. 11,725, ff. 1b–70a.

DChN/Paris: Anonymous, *Ahvāl-i Chingiz Khān vā Aqsaq Temür*, Ms. Bibliothèque Nationale, suppl. turc 143.

DChN/Dzhiganshin: *Hādhā kitāb-i faṣl-i dāstān-i nasl-i Chingiz Khān vā hām Aqsaq Temür naslindan beyān edār*, ed. by R. Dzhiganshin (Raḥīmjan Jihānsha Oghli), Kazan', 1882.

DChN/Ivanics, Usmanov: *Das Buch der Dschingis-Legende (Dāftār-i Čingiz-nāmā), I. (Vorwort, Einführung, Trnakription, Wörterbuch, Faksimiles)*, eds. by Mária Ivanics, Mirkasym A. Usmanov, Szeged: The Department of Altaic Studies, University of Szeged, 2002.

DChN/Khal'fin: *Ahvāl-i Jingiz Khān vā Aqsaq Temir (Zhizn' Dzhingiz-khana i Aksak-Timura)*, ed. by I. Khal'fin (Ibrāhīm b. Ishāq Khal'fi), Kazan': v Universitetskoi tipografii, 1822.

・『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』以外の史料

ChN: ウテミシュ・ハージー (Ötämiş Hājī) (著) 川口琢司・長峰博之(編) 菅原陸 (校閲)『チンギズ・ナーマ (Čingiz-nāma)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2008年。

MTM/Aubin: *Extraits du Muntakhab al-Tavarikh-i Mu'ini (Anonyme d'Iskandar)*, ed. by Jean Aubin, Tihān: Librairie Khayyam, 1957.

MTM/Paris: Anonymous, *Muntakhab al-Tawāriḫ-i Mu'īnī*, Ms. Bibliothèque Nationale, suppl. persan 1651.

PSRL: *Polnoe sobranie russkikh letopisei. Tom X–XI. Letopisnyi sbornik, imenuemyi Patriarshei ili Nikonovskoi letopis'yu*, SPb., 1885–97; repr. Moskva, 2000: Yazyki russkoi kul'tury.

QA: Al-Rabghūzī, *The Stories of the Prophets: Qiṣaṣ al-Anbiyā', An Eastern Turkish Version*, vol. 1, eds. by H.E. Boeschoten et al.; vol. 2, trs. by H.E. Boeschoten et al., Leiden-New York-Köln: Brill, 1995.

QAB: Kadyr Ali-bek, *Dzhami at-tavarikh*, ed. and tr. by Rysbek Alimov, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT, 2022.

QDCh/Qozha, Zhandarbek: Äbdrakhman Özkendi, *Qissa-dastan Shingghis khan: qolzhazba faksimilesi*, eds. by Mükhtar Qozha, Zikiriya Zhandarbek, Almatī: Qazaq universiteti, 2020.

QDCh/Utebekov: 'Abdurahmān Özkendi, *Qiṣṣa-i Dāstān-ı Čingiz Hān ~ Hazret-i Mīr Tēmür Dāstānı*, ed. by Senbek Utebekov, Almatī: Hoca Ahmet Yesevi Uluslararası Türk-Kazak Üniversitesi Avrasya Araştırma Enstitüsü, 2023.

QT: Utemish-khadzhi, *Kara Tavarikh*, eds. and trs. by I.M. Mirgaleev et al., Kazan': Institut istorii im.

- Sh. Mardzhani AN RT, 2017.
- ShT: *Histoire des Mogols et des Tartares par Abu l-Gāzī Bahādur Ḥān*, Tome I, ed. by Le Baron Desmaisons, SPb., 1871; repr., Frankfurt am Main: Institute of the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1994.
- TACH: Akhun Mansur ibn Abd ar-Rakhman ibn Anas al-Burunduki, *Istoriya Chingiz-khana (Tārīkh-i Āl-i Chīngiz Khān)*, ed. by I.V. Zaitsev, Moskva: ID «Medina», 2018.
- UA: Abdulgaffar Kyrymi, *Umdet al-Akhbar*, kn. 1, eds. by Der'ya Derin Pashaoglu, I.M. Mirgaleev; kn. 2, trs. by Yu.N. Karimova, I.M. Mirgaleev, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT, 2014–18.

●研究文献

- Agatai, U.M. 2021. “«Obladatel' soroka kopii» v spiske Daftar-i Chingiz-name: opredelenie, znachenie, simbol,” *Universum Humanitarium*, 1, pp. 92–114.
- Äkhmätjanov, M.I. 2006. “«Däftäre Chīnggīznamä» kitabı kul'yazmaların öyränü yulında ber täjribä,” in *Tatar ädäbiyatı tekstologiyase mäsläklärä (Urta gasırlar – XX yüz bashı)*, Kazan: TR FA G. Ibrahimov isem. tel. ädäbiyat häm sängat' institutı, pp. 16–24.
- (Akhmetzyanov, M.I.). 2011. “Dastan «Amat, syn Aisy»,” *Zolotoordynskaya tsivilizatsiya*, 4, pp. 114–118.
- Alimov, R. 2023. “O marginaliyakh sanktpeterburgskoi rukopisi «Dzhami at-tavarikh» Kadyr Ali-beka,” *Zolotoordynskoe obozrenie*, 11(2), pp. 285–302.
- Binbaş, Evrim. 2018. “Condominial Sovereignty and Condominial Messianism in the Timurid Empire: Historiographical and Numismatic Evidence,” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 61, pp. 172–202.
- Bloch, Edgar. 1932. *Catalogue des manuscrits turcs. Tome I: Ancien fonds, nos 1–396. Supplément, nos 1–572*, Paris: Bibliothèque nationale.
- Burton, Audrey. 1997. *The Bukharans: A Dynastic, Diplomatic and Commercial History 1550–1702*, Richmond: Curzon.
- Csik, Gergely. 2006. “The *Tuzūkāt-i Tīmūrī* as a Source for Military History,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung.*, 59(4), pp. 439–491.
- DeWeese, Devin. 1994. *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, University Park, PA: The Pennsylvania State University Press.
- Erofeeva, I.V. 1997. “Kazakhskie khany i khanskie dinastii v XVII–seredine XIX vv.,” in *Kul'tura i istoriya Tsentral'noi Azii i Kazakhstana: problemy i perspektivy issledovaniya*, Almaty: Izd. Instituta filosofii MN-AN RK, pp. 46–144.
- Frank, Allen J. 1998. *Islamic Historiography and 'Bulghar' Identity among the Tatars and Bashkirs of Russia*, Leiden-Boston-Köln: Brill.

- . 2000. “Historical Legends of the Volga-Ural Muslims concerning Alexander the Great, the City of Yelabuga, and Bāchmān Khān,” in *Revue des mondes musulmans et de la Méditerranée*, 89–90, *Figures mystiques des mondes musulmans*, Aix-en-Provence: Édisud, pp. 89–107.
- Galyautdinov, I.G. 1981. “Paleograficheskie osobennosti spiskov pamyatnika “Daftar-i Chingiz-name”,” in *Bartol'dovskie chteniya 1981. god pyaty*, Moskva: Izd-vo “Nauka”, pp. 27–28.
- Gibadullin, I.R. 2019. “Anonimnoe persoyazychnoe sochinenie «Khikayat»: istochnik po istorii Volgo-Ural'ya,” *Zolotoordynskoe obozrenie*, 7(4), pp. 687–719.
- Göncöl, Csaba. 2021. “The Chapter of Bārdi Bāk khan in the *Čingiz-nāmā* of Ötämiš Hājji Tolu Bay, āmīr of the Golden Horde,” *Acta Orientalia Hung.*, 74(1), pp. 53–63.
- Gorskii, A.A. 2000. *Moskva i Orda*, Moskva: «Nauka».
- Halperin, Charles J. 1976. “The Russian Land and the Russian Tsar: The Emergence of Muscovite Ideology, 1380–1408,” in *Forschungen zur osteuropäischen Geschichte*, Band 23, Berlin-Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 7–103.
- Hofman, H.F. 1969. *Turkish Literature: A Bio-Bibliographical Survey*, section 3, part 1, vol. 1. Utrecht: The Library of the University of Utrecht.
- Howorth, Henry. 1880. *History of the Mongols: From the 9th to the 19th Century, Part II, The So-called Tartars of Russia and Central Asia*, division I, London: Longmans, Green, and Co.
- İnan, Abdülkadir. 1934a. “Destân-ı nesl-i Çengiz Han kitabı hakkında,” *Azerbaycan Yurt Bilgisi*, 3(25), pp. 9–14.
- . 1934b. “Destân-ı nesl-i Çengiz Han kitabı hakkında II,” *Azerbaycan Yurt Bilgisi*, 3(28), pp. 131–133.
- Iskhakov, D.M. 2011. “Oдно iz vazhnykh nablyudenii Ibn Battuty po vnytnennemu ustroistvu Zolotoi Ordy,” in *Zolotoordynskoe nasledie*, 2, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT, pp. 21–27.
- Ivanics, Mária. 1997. “Das neugefundene *Altan Debter*? (Textkritische Untersuchungen zum *Dāftār-i Činggis nāmā*),” in *Historical and linguistic interaction between Inner-Asia and Europe*, ed. by Árpád Berta, Szeged: The Department of Altaic Studies, University of Szeged, pp. 127–137.
- . 2011. ““The Donkey Turned into a Girl”: A Motif among the Turkic Peoples,” *Turkic Languages*, 15(1), pp. 68–77.
- . 2017. *Hatalomgyakorlás a steppén: A Dzsingisz-náme nomád világa*, Budapest: MTA Bölcsészettudományi Kutatóközpont, Történettudományi Intézet.
- Miller, David B. 1995. “How the Mother of God Saved Moscow from Timur the Lame's Invasion in 1395: The Development of a Legend and the Invention of a National Identity,” in *Forschungen zur osteuropäischen Geschichte*, Band 50, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp. 239–274.
- Mustakimov, I.A. 2008. “Termin «Zolotoi prestol» v Povolzh'e po dannym arabo-grafichnykh istochnikov (K voprosu o statuse g. Bulgara na ordynskom i postordynskom prostranstve),” *Gasirlar avazi – Ekho vekov*, 1, pp. 142–157.

- . 2009. “Ob odnom spiske «Daftar-i Chingiz-name,” in *Srednevekove tyurko-tatarskie gosudarstva*, 1, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT, pp. 122–131.
- . 2013. “Arabografichnye narrativnye istochniki po istorii tyurko-tatarskikh gosudarstv XV–XVIII vv.,” in *Srednevekove tyurko-tatarskie gosudarstva*, 5, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT, pp. 48–56.
- Nagamine, Hiroyuki. 2019a. “Eshche paz o sochinenii Kadyr-ali-beka («Dzhami at-tavarikh / Sbornik letopisei»),” *Zolotoordynskoe obozrenie*, 7(1), pp. 115–130.
- . 2019b. “On the *Jadwal* of Kök Orda and Aq Orda in the Paris Manuscript of *Muntakhab al-Tawārīkh-i Mu'īnī*,” in «*Sariarqa jāne Altın Orda: waqit pen kengistik*», Almaty: Qozha Akhmet Yasawi atındaghı Khaliqaralıq qazaq-türk universiteti Euraziya ghilimi-zertteu instituti, pp. 40–48.
- . 2023. “*Jadwal* in the Paris Manuscript of the *Muntakhab al-Tawārīkh-i Mu'īnī* and Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, B. 411,” *MUSEUM.KZ*, 1(2), pp. 31–42.
- O'Flynn, Thomas S.R. 2017. *The Western Christian Presence in the Russias and Qājār Persia, c.1760–c.1870*, Leiden-Boston: Brill.
- Panov, V.A. 1934. *Avtobiografiya Timura. Bogatyrskie skazaniya o Chingis-khane i Aksak-Temire*, Moskva: Academia.
- Pertsch, Wilhelm. 1889. *Verzeichniss der Türkischen Handschriften der Königlichen Bibliothek zu Berlin*, Berlin: A. Asher & Co.
- Rakhim, Ali. 2004. “Novye spiski tatarskikh letopisei,” in *Problemy istorii Kazani: sovremenniy vzglyad*, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT, pp. 555–594.
- Rākhim, G. (Rakhim, Ali), Gaziz, G. 1925. *Tatar ädäbiyätī tarikhī: Feodalizm дәvere*, 2 basma, Kazan: Tatar. matb. hām nāshr. kombinatī nāshr.
- Rieu, Charles. 1888. *Catalogue of the Turkish Manuscripts in the British Library*, London: Longmans.
- Sabitov, Zh.M. 2014. “Emiry Uzbek-khana i Dzhani-bek-khana,” *Zolotoordynskoe obozrenie*, 2(4), pp. 120–134.
- Seityag'yaev, N.S. 2011. “V.I. Vernadskiy adına Milliy ilmiy kitaphaneniñ Elyazma bolüginde bulunğan qırımtatar ve türk tarihları, tilleri ve edebiyatları boyunca malzemeler,” in *Trudy NITS krymsko-tatarskogo yazyka i literatury KIPU*, Tom 1, Simferopol': KRP «Izd-vo «Krymuchpedgiz», pp. 335–357.
- . 2021. “Do pitannya atributsii rukopisnogo zbirnika “Abu-l-Gazi. Rodovid tyurkiv” iz zibrannya IR NBUV,” *Skhidnii svit*, 2021, 2, pp. 1–42.
- . 2022. ““Rozdil pro Idiki” z rukopisnogo zbirnika “Abu-l-Gazi. Rodovid tyurkiv” IR NBUV (pokhodzheniya, mova i zmist),” *Skhidnii svit*, 2022, 1, pp. 53–64.
- Sela, Ron. 2011. *The Legendary Biographies of Tamerlane: Islam and Heroic Apocrypha in Central Asia*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Seleznev, Yu.V. 2009. *Elita Zolotoi Ordy*, Kazan': Izd-vo «Fen» AN RT.

- Shafighi, M. et al. 2015. *Qazaq zhazbalarındaghı khandar shezhiresi*, Almatı: Ghilim ordası.
- Trepavlov, V.V. 2009. “Rodonachal’niki Ashtarkhanidov v Desht-i Kipchake (zametki o predystorii bukharskoi dinastii),” in *Tyurkologicheskii sbornik 2007–2008*, Moskva: Vost. lit., pp. 370–395.
- . 2011. “Zolotaya Orda posle raspada: vospominaniya o edinstve,” in *Tyurkologicheskii sbornik 2009–2010*, Moskva: Vost. lit., pp. 360–383.
- Usmanov, M.A. 1972. *Tatarskie istoricheskie istochniki XVII–XVIII vv.*, Kazan’: Izd-vo Kazan. Un-ta.
- Vasil’ev, A.V. and Balgimbaev, G.G. 1907. “Istoriya Chingiskhana i Tamerlana,” *Trudy Orenburgskoi uchenoi arkhivnoi komissii*, 19, pp. 117–157.
- Walsh, John R. 1959. “The Turkish Manuscripts in New College, Edinburgh,” *Oriens*, 12(1/2), pp. 171–189.
- Zaitsev, I.V. 2009. “Arabskie, persidskie i tyurkskie rukopisi v Khadzhi-Tarkhane / Astrakhani,” *Pax Islamica*, 2(3), pp. 206–211.
- . 2014. “Obrazovanie Krymskogo khanstva,” in *Istoriya Tatar s drevneishikh vremen, v semi tomakh, tom IV, Tatarskie gosudarstva XV–XVIII vv.*, Kazan’: Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT: 130–146.
- . 2016. “Novaya rukopis’ Shory Nogmova: Shora Nogmov, shotlandskie missionery, Yulius Klaprot i tyurkskie rukopisi,” *Transcaucasica*, 2015–2016, 3, pp. 102–112.
- Zhuchkova, I.L. 1984. “Povest’ o Temir-Aksake v sostave letopisnykh svodov XV–XVI vv. (redaktsiya B),” in *Drevnerusskaya literature. Istochnikovedenie. Sbornik nauchnykh trudov*, Leningrad: Izd-vo «Nauka», leningradskoe otdelenie, pp. 97–109.
- 赤坂恒明 2016 「ペルシア語・チャガタイ語諸史料に見えるモンゴル王統系譜とロシア」小澤実・長縄宣博（編著）『北西ユーラシアの歴史空間：前近代ロシアと周辺世界』北海道大学出版会、233–259頁。
- 阿部重雄 1996 『タチーシチェフ研究：18世紀ロシアー官僚＝知識人の生涯と業績』刀水書房。
- 磯貝真澄 2015 「東洋学者とつながるムスリム知識人」『歴史論評』7月号、58–66頁。
- 川口琢司 2002 「ジョチ・ウルスにおけるコンクラト部族」志茂碩敏（研究代表者）『ポストモンゴル期におけるアジア諸帝国に関する総合的研究』75–92頁。
- 2007 『ティムール帝国支配層の研究』北海道大学出版会。
- 2009 「18世紀クリミアのオスマン語史書『諸情報の要諦』における歴史叙述：ペルシア語文献からの影響を中心に」森本一夫（編著）『ペルシア語が結んだ世界：もうひとつのユーラシア史』北海道大学出版会、147–173頁。
- 川口琢司・長峰博之 2013 「ジョチ・ウルス史再考」『内陸アジア史研究』28、27–51頁。
- 北川誠一 1997 「モンゴルとイスラーム」杉山正明・北川誠一（著）『大モンゴルの世界』中央公論社、291–451頁。

- 栗生沢猛夫 2019 『イヴァン雷帝の『絵入り年代記集成』：モスクワ国家の公式的大図解年代記研究序説』成文社。
- 小林高四郎 1982 「Çengiz name について：書誌学的紹介」『モンゴル史論考』雄山閣出版、195–213 頁。（初出は『人文論究』17、1957 年）
- シンメルペンニク=ファン=デル=オイェ, デイヴィド 2013 浜由樹子（訳）『ロシアのオリエンタリズム：ロシアのアジア・イメージ、ピョートル大帝から亡命者まで』成文社。
- 豊川浩一 2006 『ロシア帝国民族統合史の研究：植民政策とバシキール人』北海道大学出版会。
- 長峰博之 2009 「「カザク・ハン国」形成史の再考：ジョチ・ウルス左翼から「カザク・ハン国」へ」『東洋学報』90 (4)、1–26 頁。
- 2014 「カーディル・アリー・ベグの史書について：ジョチ・ウルス継承政権史料の史料的价值とその歴史認識」『イスラム世界』81、1–31 頁。
- 2023 「ジョチ・ウルス後裔政権史料は何を参照し、ジョチ・ウルス再編をいかに認識したのか？」野田仁（編）『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、5–52 頁。
- バルトリド, ウェ 1939 外務省調査部（訳）『欧州殊に露西亜に於ける東洋史研究』生活社。
- 宮野裕 2023 『「ロシア」は、いかにして生まれたか：タタールのくびき』NHK 出版。
- 吉田順一 2019 「『アルタン=デブテル』について」『モンゴルの歴史と社会』風間書房、143–166 頁。

(小山工業高等専門学校)